

牧師室から (2020.12.13)

クリスマスを迎える時になると、いつも思い出されることがある。

東神大を卒業してから、新宿で、詳しく言えば新大久保駅前の矯風会のビルの一室を借りて開拓伝道をしていた時のことである。

最初は誰もいないところで涙を流しながら一人で礼拝をささげていたが、2年目のクリスマスを迎える頃には30人ぐらいの出席になっていた。韓国人がほとんどであったが、韓国人女性の夫である日本人もいた。何人かは、留学生や自営業の人、少し年配の男の人は日雇いの力仕事をしていたが、しかし、大抵は新宿の酒場で働いている人であった。

異国の地でクリスマスを迎える彼らのために、小さなクリスマスカードと500円ぐらいのプレゼントを用意して配った。

クリスマス礼拝、祝会を終えてホッとした気持ちで帰った日の夜である。○○さんという方から電話があった。彼は50歳くらいで、一日2,000円の民泊というところに泊まりながら、日雇いの力仕事をしていた。電話の向こうから彼が言った。「先生、今日のクリスマスカードとプレゼントをありがとうございます。このようなものをもらったのは初めてです。とても嬉しいです。ありがとうございます。」何度もお礼を言いながら彼は泣いていた。しばらく話し合い、電話を切った私は膝まずき、泣きながら、神様に許しを乞うた。

そのささやかなものに感動している彼の電話によって、彼らの不幸な生い立ちや不安定な生活の痛みを感じ取るよりも、不機嫌なことがあると喧嘩ばかりしたり、人が増えれば増えるほど様々な問題に関わらなければならないことに疲れてしまい、いつの間にか愛を失っていた自分を見ることができたのだ。

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく罪人を招くためである。(マルコ2:17)」と言われた主イエスのお言葉を覚えながらも、いつのまにかファリサイ派の一人になっていた自分に気づかされ、涙で過ごしたクリスマスの夜であった。

クリスマスの記憶と共に、今も、この世の片隅で彷徨っているに違いない彼らを思い浮かべつつ、いろいろなことが頭をよぎるこの頃である。

(鈴木善姫牧師)